

臨地実習における看護学生の気づきに関する文献検討

A Literature Review on the Awareness of Nursing Student in Clinical Practice

乗越千枝

Chie Norikosi

要旨

看護基礎教育において臨地実習による経験学習は看護専門職を育成するために根幹をなす教育方法となっている。本研究の目的は、「臨地実習における看護学生の気づき」の概念を文献検討から明らかにすることである。対象文献は日本国内に限定し、37論文を対象論文とした。倫理的配慮として、文献の使用にあたっては出典を明らかにし、筆者の意図を損なわないよう文献を精読し分析した。分析はRodgersの概念分析のアプローチ方法を参考にした。結果、臨床実習における看護学生の気づきの属性は、【看護場面で感じ注目し関心を持つ】、【振り返り言語化する】が抽出された。先行因子は、【実習環境】、【患者・家族との会話】、【看護師の実践の観察】、【看護の実践】、【緊張の軽減】、【他学生の状況と共有】、【教員・指導者からの助言】、帰結は、【対象は生活する主体であり個性・多様性がある】、【学生自身が自分の傾向を知り、新たな学びを得る】、【看護には意味と必要性がある】、【満足感】が抽出された。分析の結果、臨地実習における看護学生の気づきは、看護場面で感じ注目し関心を持つことであり、その経験を振り返り言語化することと定義した。

キーワード：看護基礎教育 臨地実習 経験学習 学習過程 気づき

I. はじめに

看護基礎教育においては看護の実践科学という性質から実習に重点を置いた教育が行われている。また、保健師助産師看護師学校養成所指定規則（厚生労働省，2015）においても臨地実習は23単位の履修が義務づけられ、看護人材の育成においても必須の学習方法となっている。それは、臨地実習は学生が知識、技術、態度などの能力を獲得し、看護職としての職業アイデンティティを形成していく重要な学習の場であるとされているからである。臨地実習では療養者やその家族と直接接し看護実践に参加するという経験を通じて学習する。このような経験学習はJohn Dewey（Dewey, 2004）をはじめとする様々な研究者によって人材育成における中心的な学習理論となっている。経験学習においては経験学習モデル（Kolb, 1984）が有名であるが、経験から何をどのように学ぶのかということは、看護基礎教育においても重要な論点である。

現在、看護実践の場は病院などの医療機関にとどまらず、療養者の自宅、高齢者や障害者の入所施設、デイケア、作業所、自治会、コミュニティ、学校、企業などの労働活動の場など多岐にわたっている。同様に看護基礎教育においても学修目的に応じて看護実践の場を確保し、学修環境を調整する必要がある。その看護実践の場で学生が具体的な経験を蓄積し、多角的な視点から振り返ることによって、経験を通じた学びができるのである。先行研究においては看護学生がこの具体的な経験から内省する際の記述や、学習過程から得られる概念抽象化に関する研究報告は多く発表されている。また、実習における「気づき」の研究報告は多くなされているが、その内容の多くが実習の学びについて報告されたものであり、気づきと学びが同義として使用されている。また、学生が実習において気づくという事象について具体的はどのようなものであるか論じられたものは殆どない。概ね気づきの定義が曖昧で、経験から抽

象化における「気づき」そのものに焦点をあてた報告はあまり見当たらない。

一方、看護分野では経験学習の状況を表す際に「気づく」というワードを一般用語としてよく使用する。そもそも一般的に気づくとは、「思いがそこにいたる。気が付く。感づく。」(新村, 2018)とされ、概ねそのように使用している。また、看護実践においても、気づくことの重要性がうたわれることは少なくなく(柳田, 2011)、気づく力を向上させる研修も盛んにおこなわれている。ただし、看護基礎教育において概ね気づきは一般的な意味で使用され、何をもって気づきとしているのか曖昧である。

そこで、本研究では、臨床実習における看護学生の気づきの概念を文献検討から明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

本研究の研究方法は文献研究である。対象文献は日本国内に限定し、臨床実習における看護学生の気づきに関する論文とした。文献収集に使用したデータベースは医学中央雑誌 web 版, CiNii Articles とした。検索語は「臨床・臨地実習」「看護学生」「意識性 or 気づき」とし、1998 年から 2018 年の過去 20 年に発表された論文から、原著論文の 188 論文に絞り込んだ。抄録から、研究対象が学生以外の者であるもの、演習に関するもの、文献検討、助産師課程、保健師課程等を除外して 66 論文を抽出した。更に、論文タイトルには気づきの記載があるものの、論文本文内に気づきの内容の記載がないものなどを除外し、研究目的に合致する 37 論文を対象論文とした。分析方法には Rodgers の概念分析のアプローチ方法 (Rodgers, 2000) を参考にした。まず、対象論文を精読し、臨床実習における看護学生の気づきの属性、先行因子、帰結に関する記述を抽出した。その抽出した記述をコード化し、類似性と相違性でカテゴリ化した。その後、カテゴリの関係性から構造化して概念モデルを作成した。

倫理的配慮として、文献の使用にあたっては出

典を明らかにし、筆者の意図を損なわないよう文献を精読し分析した。

III. 結果

1. 対象論文の概要

対象の 37 論文の研究対象者は 25 論文が大学生、4 論文が短期大学生、8 論文が専門学校生であった。実習領域では精神看護学 7 論文、成人看護学 6 論文、基礎看護学と小児看護学が各 5 論文、その他、在宅看護学、地域看護学、総合実習などであった。データは 11 論文が面接調査、3 論文が質問紙調査で収集し、その他、リフレクションジャーナル、プロセスレコード、レポートなどの実習記録を使用し、全て質的分析を行っていた。(表 1)

2. 臨地実習における看護学生の気づき

分析の結果、属性、先行因子、帰結が抽出された。以下、カテゴリは【】サブカテゴリは [] で示す。

1) 属性

臨床実習における看護学生の気づきの属性は、実習の [看護場面で感じる] [注目する] [関心を持つ] という【看護場面で感じ注目し関心を持つ】ことと、[振り返る] [言語化する] という【振り返り言語化する】を抽出した。(表 2)

2) 先行因子

臨床実習における看護学生の気づきの先行因子は、【実習環境】、【患者・家族との会話】、【看護師の実践の観察】、【看護の実践】、【緊張の軽減】、【他学生の状況と共有】、【教員・指導者からの助言】が抽出された。(表 3)

3) 帰結

臨床実習における看護学生の気づきの帰結は、[生活する主体としての対象と家族]、[対象者の個別性・多様性]、[家族看護の視点] から【対象は生活する主体であり個別性・多様性がある】、[自分の先入観や思考の傾向認識のずれを知る]、[新たな学びを得る] から【学生自身が自分の傾向を知り、新たな学びを得る】、そして、【看護には意味と必要性がある】、【満足感】を抽出した。

(表 4)

表1. 対象文献の概要

著者名 (年)	研究対象	対象実習	データ/調査方法	分析方法
1 道廣ら (2018)	大学2年生 68名	基礎看護実習Ⅱ	RJ*	質的帰納的分析
2 菅原ら (2017)	専門学校生 10名	小児看護学実習	半構造化面接	カテゴリ化
3 白石ら (2017)	大学生	母性看護学実習	半構造化面接	質的分析
4 齊藤 (2017)	大学生 8名	小児看護外来実習	レポート	KJ法
5 鈴木ら (2017)	大学生 64名	在宅看護学実習	レポート	質的分析
6 山本ら (2016)	大学4年生 55名	小児看護学実習	課題レポート	質的帰納的分析
7 畠ら (2016)	大学生 6名	精神看護学実習	インタビュー	質的帰納的分析
8 西田ら (2016)	専門学校3年生 424名	統合実習以外の実習	調査用紙	内容分析
9 後藤ら (2016)	大学4年生 10名	総合実習	半構造化面接	質的帰納的分析
10 棟近ら (2016)	専門学校3年生 20名	成人看護学実習	レポート	カテゴリ化
11 村重ら (2016)	大学4年生 7名	精神看護学実習	半構造化面接	質的分析
12 岡本ら (2015)	大学4年生 14名	総合実習	実習記録	質的帰納的分析
13 早船 (2014)	専門学校3年生 5名	臨地実習全般	半構造化面接	質的分析
14 今井 (2013)	専門学校生 4名	小児看護学実習	半構造化面接	質的分析
15 松永ら (2013)	大学4年生 70名	臨地実習全般	RJ	類似による分類
16 加藤 (2013)	大学4年生 18名	精神看護学実習	自記式質問紙	質的分析
17 石田 (2012)	大学2年生 24名	精神看護学実習	実習記録	内容分析
18 鯉坂ら (2012)	大学3年生	成人看護学実習	半構造化面接	KJ法
19 堂下ら (2012)	大学生 62名	精神看護学実習	プロセスレコード	カテゴリ化
20 佐藤 (2012)	専門学校生3年生 2名	成人看護急性期実習	半構造化面接	カテゴリ化
21 道廣ら (2009)	大学1年生	基礎看護実習	課題レポート	質的帰納的分析
22 谷村ら (2011)	大学3年生 4名	成人慢性看護学実習	課題レポート	M-GTA
23 岡本 (2011)	短期大学1年生 11名	基礎看護実習	半構造化面接	GTA **
24 繁田 (2011)	短期大学3年生 2名	全実習	面接	質的分析
25 石井ら (2007)	大学生	成人看護学慢性期実習	レポート	質的分析
26 吉田 (2009)	専門3年生 36名	地域看護学実習	課題レポート	質的分析
27 中野ら (2009)	大学2年生 10名	精神看護学実習	記述	質的分析
28 寺島ら (2008)	大学3年生 1名	領域別実習	プロセスレコード	質的分析
29 矢吹 (2008)	短期大学3年生 51名	精神看護学実習	実習記録	カテゴリ化
30 神庭ら (2008)	大学生	早期体験実習	実習記録	質的分析
31 片岡ら (2008)	大学生 79名	地域基礎看護学実習	レポート	カテゴリ化
32 安藤ら (2008)	大学生2年生 88名	基礎看護学実習	RJ	質的記述的方法
33 中田ら (2005)	大学2年生 66名	基礎看護実習	RJ	質的分析
34 久代ら (2004)	大学3年生 44名	老年看護臨地実習	実習記録	カテゴリ化
35 三ヶ島ら (2003)	専門学校生 7名	訪問看護実習	実習記録	カテゴリ化
36 佐々木ら (2001)	大学4年生 15グループ	小児看護学実習	実習記録	カテゴリ化
37 阪口ら (2000)	短大3年生 79名	小児看護学実習	カード	質的研究

*RJ : Reflection Journal **GTA : グラデッド・セリアティブ・ローチ

表2. 臨地実習における看護学生の気づきの属性

カテゴリ	サブカテゴリ	記述
看護場面で感じ注目し 関心を持つ	看護場面で感じる	直感的に理解したことの本質の意味を明らかにする 看護場面で感じたこと, 思ったこと, 考えたこと 臨地実習で最も印象に残っている場面を振り返る
	関心を持つ	気にかかったことやその場で起こったことに関心を持つ
	注目する	注目したことや感じたこと考えたこと 自身の感情や思考を自覚する
振り返り言語化する	振り返る	振り返える 他者との関係を吟味する 内面化
	言語化する	整理をする 言語化する 記述したもの

表 3. 臨地実習における看護学生の気づきに関する先行因子

カテゴリ	記述
患者・家族との会話	患者からのケアの拒否 患者とのコミュニケーションが難しい場面 患者の状態, 反応, 言動 コミュニケーション
緊張の軽減	感情 緊張の軽減
看護の実践	日々の援助 看護技術の実践 学生自身でできた実感 十分できなかったこと
看護師の実践の観察	看護師の実際 看護師の観察と判断
他学生の状況と共有	患者・学生同士のやりとり 他学生の状況 学生との共有
教員・指導者からの助言	教員・指導者からの助言 教師との対話
実習環境	実習環境

図 1. 臨地実習における学生の気づきの概念モデル

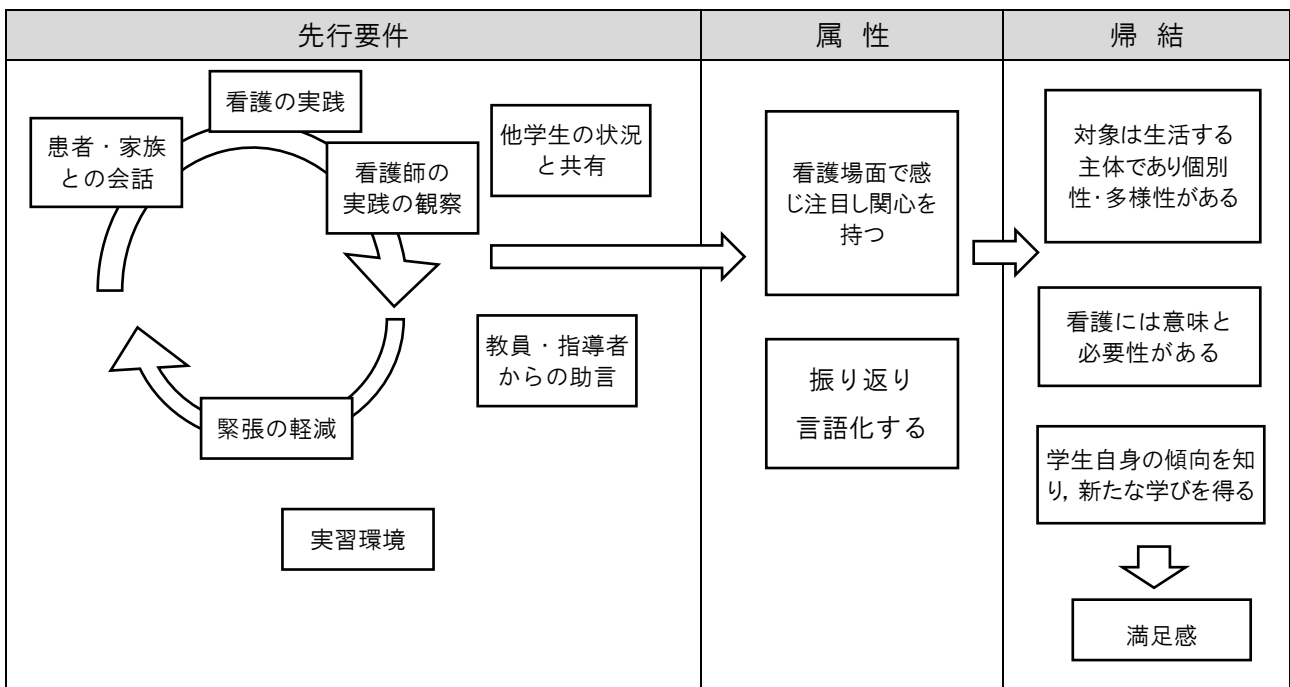


表 4. 臨地実習における看護学生の気づきに関する帰結

カテゴリ	サブカテゴリ	記述
対象は生活する主体であり 個別性・多様性がある	生活する主体としての対象 と家族	患者の本当の気持ち 対象/患者の思い 生活者 患者と家族の力 患者の健康的な面 決定者は利用者と家族
	対象者の個別性・多様性	対象の個別性 多様性 患者の変化
	家族看護の視点	対象と家族の関係 家族看護の視点 家族支援
学生自身が自分の傾向を知り, 新たな学びを得る	自分の先入観や思考の傾向 認識のずれを知る	認識のずれ イメージの違い 自分の思い込み, 偏見・先入観 自己の患者観 自己の援助姿勢の傾向 自分の傾向 自己理解 考えの間違い 自分の思いの優先 自己の技術の未熟さ
	新たな学びを得る	自分自身の生き方 他者から学べること 新しい世界を知る
看護には意味と必要性がある		看護技術・基本の重要性 コミュニケーション, 関わり方 必要な看護 援助の意味 知識との統合 技術の難しさ 観察点 会話も情報収集の手段 信頼関係を形成し, 安心感を提供 環境に応じた援助 訪問時以外の時間の存在
満足感		満足感

4) 概念モデル

以上の結果から、臨地実習における看護学生の気づきにおける概念モデルを作成した

(図1). 学生は気づきの先行因子として、【実習環境】で緊張をしながらも、【患者・家族との会話】をし【看護師の実践の観察】しつつ、自らも【看護の実践】を行っていた。それらの経験を積みながら実習が進むにつれ、【緊張の軽減】ができていた。また、先行因子には【他学生の状況と共有】と、【教員・指導者からの助言】があった。

そして、これらの経験学習のプロセスにおいて、学生は【看護場面で感じ注目し関心を持つ】、そして【振り返り言語化する】ことが分かり、それが臨地実習における看護学生の気づきであった。

その気づきの帰結として、学生は【対象は生活する主体であり個別性・多様性がある】、【学生自身の傾向を知り、新たな学びを得る】、【看護の意味と必要性がある】ことを学び【満足感】を得ていた。

IV. 考察

1. 臨地実習における看護学生の気づきの定義

臨地実習における看護学生の気づきは、属性の結果から、臨地実習における看護場面で感じ注目し関心を持つことであり、その経験を振り返り言語化することであると定義できると考えられる。

2. 臨地実習における看護学生の気づきの特徴

殆どの対象論文において、「気づき」の定義がみられず、一般用語での使用と同じ意味で捉え使用していた。しかし、研究者によって「気づき」の意味合いは微妙に異なっていた。今回の抽出された属性から、臨地実習における看護学生の気づきは、【看護場面で感じ注目し関心を持つ】では、環境からの刺激と、自己の内面で起こる心理的な動きを指す

Awareness な状態を指すことが推察される。脳科学においては、気づきとはこころの動き(山鳥,2018)との見解があり、認知心理学においては、気づくということ「何に注意を引きつけられるか」(横沢,2017)ともされている。

学生が【看護場面で感じ注目し関心を持つ】には、ただ経験させるのではなく、【教員・指導者からの助言】や【他学生の状況と共有】のように、共に経験し刺激を受ける同朋と、学生が真の経験ができる学習支援者が必要なことがわかる。特に在宅看護学実習では療養者の自宅を訪問するが、その看護場面において学生によって気づきの差が著しく感じている。人によって注目し関心を持つ事象が異なることは当然のことである。しかし、明確な意図のある教育の場合、学生に経験し着目してほしい事象や情報はある。経験学習の重要な点としてはもたれる経験の「質」にかかっている(Dewey,2004)。漫然とした経験ではなく、なぜこの経験をしているのかという経験の目的を学生自身によって真に理解されるように支援していく必要があるであろう。その結果、学生が看護場面に目を向ける意識を持つようになるのではないだろうか。気づけるためには感性の育成することが大切である(柳田,2011)が、一方、目的を意識化させることが、目を向け見て聞いて臭って感じるという五感を使って、その場の情報を受容できるようにする可能性を大いに含んでいると考える。前述した療養者宅での実習で、なかなか気づくことが難しい学生は、病院と違い療養者と家族の生活、人生の集合体である生活の場である家に存在する膨大な刺激(情報)で、目的を見失い何に目を向けてよいのか混乱していることも考えられる。先行因子で抽出された【教員・指導者の助言】においては、学生の何を情報収集したのかに重点を置き、チェックリストのように指導してしまうこともある。しかし、それ以前に自分の経験の目

的を学生自身が意識できるような助言を行うことによって、結果的に感じ注目し関心を持つことができるかもしれない。また、学生が実習において目的を見失い混乱しないようにするには【緊張の軽減】が必要であり、緊張を強いられる実習の場においては、情緒を安定する精神的支援やセルフコントロールができるようにトレーニングしていくことも必要であろう。しかし、学生が【看護場面で感じ注目し関心を持つ】ためには、未だ方策が不十分であると推測される。更に、学生が何を感じ何に着目しどうして関心を持つのか探求することによって、その糸口が見つけ出される可能性があるかもしれない。

また、【振り返り言語化する】は、経験学習プロセスにおける内省的観察と抽象化

(Kolb,1984) に合致する。学生がこのプロセスに進め、効果的に経験したエピソードを想起し言語化するためには、まず、じっくりと振り返る時間と環境が必要であり、何を振り返るのかどのように振り返るのか、様々な仕掛けとそれを支援する他者の存在(中原,2010)が必要である。今回の対象論文においても、内省活動を支援するための方策としてリフレクションジャーナルの活用がみられたように、実習記録の工夫も振り返りと言語化への有効な学習支援であることが考えられる。

3. 今後の課題

今回、臨床実習における学生の気づきについては二側面があることが示唆されたが、特に、学生の【看護場面で感じ注目し関心を持つ】機序やプロセスについて更に探求していく課題を得ることができた。海外の学習プロセスにおける気づきに関する先行研究についても文献レビューし、臨床実習を終えた学生に対して面接調査を行い、質的帰納的研究を進め、学修プロセスにおける気づきについて、更に探求していく予定である。

V. 結論

臨地実習における看護学生の気づきは、看護場面で感じ注目し関心を持つことであり、その経験を振り返り言語化することである。

本研究における利益相反事項はない

本論文は第45回日本看護研究学会学術集会で発表したものに加筆修正した。

文 献

なお、概念分析に使用した対象論文の末尾には*印を付与している。

- 鱒坂由紀, 小松万喜子 (2012). 患者との関わりに困惑した看護学生の反省的実践の様相. 日本看護学教育学会誌, 22 (2), 27-39.*
- 安藤敬子, 古庄夏香, 原百合, 青山和子, 窪田恵子, ほか (2008). 基礎看護学実習の記録における看護専門職としての思考に注目した研究 リフレクティブサイクルを用いて. 西南女学院大学紀要, 12, 47-54.*
- Dewey, J. (著)・市村尚久 (訳) (2004). 経験と教育, 東京: 講談社.
- 堂下陽子, 中村真理子 (2012). 精神看護学実習におけるプロセスレコードを活用した学生の学習内容と教育上の課題. 長崎県看護学会誌, 8(1), 1-8.*
- 後藤佳子, 鈴木啓子 (2016). 看護管理実習における学生の学び. 三育学院大学紀要, 8 (1), 1-7.*
- 畠菜冬, 美濃由紀子, 高濱圭子, 田上美千佳, 宮本真巳 (2016). 看護場面の再構成による臨床指導 看護学生の精神看護学実習における自己への理解と活用, 精神科看護. 43 (11), 067-075. *
- 早船麻未 (2014). 臨地実習において直接的な日常生活援助技術実施場面以外で看護学生が満足感を高める要因の分析. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育

- 研究集録：教員・教育担当者養成課程看護コース 39, 97-103.*
- 久代和加子, 梶井文子, 亀井智子 (2004). 老年看護臨地実習の教育評価 介護療養型医療施設と介護老人保健施設で実施したことの意義についての検討. 聖路加看護大学紀要, 30, 97-103.*
- 今井由理 (2013). NICU 実習において学生が学んでいること 看護の心に焦点をあてて. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録：教員・教育担当者養成課程看護コース, 38, 68-75.*
- 石井俊行, 坪井敬子, 岡本裕子, 坂村八恵, 秋山智 (2007). 臨地実習における学生の学 成人看護学慢性期実習終了後のレポート分析より. インターナショナル Nursing Care Research, 6 (1), 51-58.*
- 石田隆也 (2012). 精神看護学実習前後の看護学生の精神障がい者観と学びの構造. 日本精神科看護学術集会誌, 55(2), 35-39.*
- 神庭純子, 松下延子, 藤生君江, 伊藤幸子, 上坂良子, ほか (2008). 4年制看護基礎教育課程1年次「ふれあい実習」の教育効果(1報) 学生の自己評価を分析して. 岐阜医療科学大学紀要, 2, 107-114.*
- 片岡三佳, 普照早苗, 松下光子, 藤澤まこと (2008). 地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要, 8 (2), 3-10.*
- 加藤知可子 (2013). 精神障がい者に対する大学看護学部生を対象とする偏見解消の過程に関する一考察 精神障がい者小規模作業所を用いて. 日本看護学会論文集：精神看護, 43, 147-150.*
- Kolb, D. A. (1984) *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice Hall
- 厚生労働省 (2015). 保健師助産師看護師学校養成所指定規則.
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/>
- 2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbj5.pdf) [2019/9/19 確認]
- 松永麻起子, 前田ひとみ (2013). 臨地実習のリフレクションから導かれた看護学生の気づきと批判的思考態度に関する研究. 日本看護学教育学会誌, 23(1), 43-52.*
- 道廣睦子, 藤田佳子, 滝本和子, 倉鋪桂子, 佐藤美幸, ほか (2009). 基礎看護学実習 I における看護学生の学びと気づき 実習記録の分析から, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル. 2(1), 29-35.*
- 道廣睦子, 大植由佳, 小林廣美, 長谷川幹子, 阿部真幸, ほか (2018). 基礎看護学実習 II において学生がリフレクションを取り上げた場面の特徴. インターナショナル Nursing Care Research, 17 (2), 69-79.*
- 三ヶ島禎浩, 大村美穂子, 島孝子, 松村未来, 迎真由美, ほか (2003). 訪問看護実習における看護学生の気づき 時間に焦点をあてた質的研究. 福岡県立看護専門学校看護研究論文集, 26, 71-82.*
- 村重菜摘, 美濃由紀子, 田上美千佳, 宮本真巳 (2016). 看護場面の再構成による臨床指導 精神看護学実習における学生の学びとその後の活用. 精神科看護, 43 (2), 042-047.*
- 中野実代子, 中津川順子 (2009). 早期精神看護学実習における学生の学びに関する一考察 自己認識と他者認識および協働学習の観点から. 日本看護学会論文集：看護教育, 39, 295-297.*
- 中原淳 (2010). 職場学習論, 東京：東京大学出版会.
- 中田康夫, 田村由美, 澁谷幸, 山本直美, 森下晶代, ほか (2005). 基礎看護実習におけるリフレクティブジャーナル上での教師と学生の対話の意義. 神戸大学医学部保健学科紀要, 20, 77-83.*

- 新村出編 (2018). 広辞苑 第7版, 東京: 岩波書店.
- 西田ふみ, 佐藤みつ子, 中澤明美 (2016). 臨地実習グループ内学生の援助を体験した看護学生の気づき. 看護教育研究学会誌, 8 (1), 25-32.*
- 岡本あゆみ, 田代和子, 田村千恵子, 久代和加子 (2015). 老年看護学総合実習における夜間実習の学び 認知症高齢者の対象理解をねらいとして. 淑徳大学看護栄養学部紀要, 7, 13-23.*
- 岡本寿子 (2011). はじめての臨地実習における学生の気づきからの学び. 看護教育研究学会誌, 3 (1), 53-62.*
- Rodgers, B.L., Kathleen, A.K. (2000). *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications, 2e*, Saunders, Philadelphia.
- 齊藤史恵 (2017). 小児科外来実習における看護学生の予診による症状アセスメントを通じた気づきの特徴. 弘前学院大学看護紀要, 12, 27-36.*
- 阪口しげ子, 関森みゆき (2001). 病児の理解と看護の評価 小児科病棟実習のまとめでの学生の気づきから. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 35-46.*
- 佐藤愛 (2012). 成人看護学急性期(周手術期)実習における学びのプロセス. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 教員・教育担当者養成課程看護コース, 37, 116-123.*
- 佐々木純, 濱中喜代 (2001). 小児看護実習における集団遊びに関する学生の「気づき」グループの記録からの分析. 日本小児看護学会誌, 10 (1), 37-42.*
- 繁田里美 (2011). 看護学生のスパイラルな成長プロセスの分析 インタビューと実習記録から学生の学びと成長を紐解く, 日本看護学会論文集: 看護教育, 41, 260-263.*
- 白石佳子 (2017). 早産となった母児との関わりをとおしての学生の経験. 山口県立大学学術情報, 10, 101-106.*
- 菅原美保 (2017). 小児看護学実習において学生が患児とその母親の3人で過ごす体験. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 13(1), 21-26.*
- 鈴木昭子, 前田和子 (2017). 在宅看護実習における学生の学び 終了時レポートの分析から. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 8 (1), 29-37.*
- 谷村千華, 森本 美智子, 大庭 桂子, 野口 佳美 (2011). 看護学生の成人(慢性)看護学実習における体験の内面化プロセス. 日本看護学教育学会誌, 21(1), 39-49.*
- 寺島久美, 恒吉さやこ, 松山郁子 (2008). クリティカルな状態にある患者・家族への関わりから得た学生の気づきの検討 科学的看護論を媒介にした看護場面の分析より. 日本クリティカルケア看護学会誌, 4 (2), 52-59.*
- 棟近由利子, 八城恵, 隈部直子, 伊東好子 (2016). 成人看護学実習終末期における死生観カンファレンスからの学生の学び. 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 11, 287-290.*
- 矢吹明子 (2008). 精神看護学実習における精神障害者の就労支援のための施設での学び. 京都市立看護短期大学紀要, 33, 83-93.*
- 山鳥重 (2018). 気づくとはどういうことか, 東京: 筑摩書房.
- 山本裕子, 上山和子 (2016). 小児看護学実習での学生の学びの特徴 病棟中心と外来中心の実習内容から, 新見公立大学紀要, 37, 121-126.*
- 柳田邦夫, 陣田泰子, 佐藤紀子編 (2011). その先の看護を変える気づき. 医学書院, 東京.

横沢一彦, 河原純一郎 (2017). 気づきを生み出す人の注意—その基本図式—. 情報処理, 58 (4), 282–286.

吉田久美子 (2009). 地域看護学実習における課題レポートに関する分析—生活者として捉えることの意味—. 東京医科大学看護専門学校紀要, 19 (1), 13–19.*